

氏 名 本田 優子

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 142 号

学位授与の日付 平成 17 年 9 月 30 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 アットウシの歴史に関する基礎的研究
ーアイヌ伝統文化の再検討の試みとしてー

論文審査委員 主 査 教授 吉本 忍
教授 佐々木 史郎
教授 岸上 伸啓
主任文化財 佐々木 利和（文化庁）
調査官

論文内容の要旨

本論文では、アイヌ社会において、植物の韌皮繊維を糸素材として製作されてきた「アットウシ」と呼ばれる織物および衣服が、文化的、社会的にどのような意味や役割を担っていたか、という問題について、歴史的な動態という視点から復元する検討を行なった。

第1章では、物質文化としてのアットウシに関する記述的研究を行なった。アットウシとは「アイヌが植物の韌皮繊維を糸素材として製作した織物および衣服の総称」と考えられるが、本稿での「アットウシ」は、さらにそのサブカテゴリー、すなわち「ツルウメモドキを除く木本の韌皮繊維を糸素材とする織物およびそれらから製作される衣服」を指す。

第2章では、アットウシが近世のアイヌ社会のなかで「日常着」「晴れ着」として、どのような位置をしめていたのかについて検証した。アットウシは日常着として着用され続けたほか、アイヌ社会における最も重要な宗教儀礼だとされる「熊送り儀礼」においても、基本的な儀礼装束として着用されたと考えられる。

第3章では、口承文芸にあらわれる衣服およびアットウシについての検討を行なった。アットウシは、「聖伝」のヒーローであるアイヌラックルの衣服である。アイヌラックルのまとうアットウシはその出自に深く関わるものであるが、口承文芸の中で、父系母系の出自が語られるのは、ほぼ人間の場合に限られる。それは、アイヌラックルが「人間の味の人」という名前に示されるように、アイヌ社会にはじめて暮すようになった人間と考えられているからであろう。その際、そのような存在であることを表す、最も象徴的な記号が、「人間の証」としての「アットウシ attus」である。

第4章、第5章では、近世および近代の北海道におけるアットウシの産出と流通の様相について考察した。

その結果、筆者はアットウシについて以下のように理解した。

アットウシが、文献史料に確実に登場するのは、17世紀後半、すなわち、商場知行制の矛盾の集約として起こったシャクシャインの戦い(1669)から間もない頃のことである。だが、この時期のアットウシは、まだあくまでもアイヌ自身の着衣として記録されているにすぎない。18世紀前半に入ってから、そのような状況に基本的な変化はなく、史資料に記載されている「蝦夷地産物」の欄に、アットウシの名前が挙がることはない。

しかし、18世紀半ばになると、アットウシに切伏文様を施したものにより「代物替」、すなわち交易が行われたことが記録されるようになる。「商品化」の時代を迎えたといえる。1780年代には、北海道の各地に産地が形成され、一つの地域から千枚を超す大量のアットウシが出荷されるようになった。その結果、秋田や新潟あたりまでの船乗りや百姓までもが、アットウシを常用するような状況が出現した。すなわち、アットウシの和人社会への浸透は徐々に起こったものではなく、和人社会における北海道への関心の高まりと、それと連動した江戸系の新興商人の台頭など、近世北海道の政治経済的变化と密接に結びついたものとして、一気に進行したといえる。また、場所請負制の進行にともない、多くのアイヌが伝統的共同体における生産手段から切り離され、漁場で雇われる漁場労働者となった。アットウシはそのようなアイヌ自身の労働着としても大量に流通した。

このような状況は近代に入っても継続しており、開拓使の統計資料によれば、明治10年代半ばまで、北海道全体では1万反を超えるアットウシが商品として売買されており、

和人を含む漁業労働者の基本的労働着として広く着用されていた。

このように考えると、従来の漠然としたアットゥシ観、すなわち、アイヌの伝統的な衣服であり、古来から一貫したアイヌの専有物であるかのようなイメージが、いかに根拠のないものであったかがわかる。近世も含めて、アイヌ社会は決して市場経済から隔絶したものではなかったのである。

いずれにせよ、このような 1780 年代から 1880 年代まで、ほぼ 100 年間続いた広範な流通の様相を見る限り、アットゥシはアイヌの民族的衣服というよりも、民族性を捨象した一般的な労働着として印象づけられ、今日のアイヌの儀式にみられるような、民族のアイデンティティを表出する儀礼装束としての性格を窺うことはできない。

それでは、今日のアットゥシのイメージというのは、アットゥシがアイヌの日常から消えてしまってから創出された幻想でしかないのだろうか。筆者はそうは考えない。アットゥシは、アイヌ文化のアイデンティティを表現するものとして、一貫して存在していたのである。

それを解く鍵は、熊送り儀礼や口承文芸などの中に存在していると考えられる。たとえば、口承文芸の中で、アットゥシは「聖伝」の主人公であるアイヌラックルとのみかたく結びつき、その固有の記号として意識されている。アイヌラックルは、人間の起源を表現する存在である。つまり、「われわれの祖先」とつながるアットゥシは、自らの文化的なアイデンティティを語る衣服としての地位を持つのである。

また、熊送り儀礼を描いた絵画資料にみられるように、アットゥシは近世においても、最高位の神と向き合う際の儀礼装束として着用されていたことを、理解することができるのである。それは、「服属儀礼」としての性格を持つ対和人儀礼における衣裳と比較してみれば明らかである。

重ねて強調するならば、アットゥシに対して流布しているイメージ、すなわち小さな閉じられた共同体の中でアイヌが占有的に着用していた伝統的衣服であるという見方は、歴史的な検証を経ないステレオタイプの理解にすぎない。アットゥシは、100 年もの間、和人も含めて一般的に着用された、北海道における基本的な労働着であった。

しかし、だからといって、アイヌ社会においては単なる労働着として存在したわけではない。口承文芸におけるあらわれ方や、クマ送り儀礼における着用にみられるように、なによりもまず、アイヌ自身にとっては、みずからを表現するもの以外の何ものでもなかったのである。このように理解することにより、一見不統一で様々に異なって見えるアットゥシ像を、全体的に理解することが出来ると筆者は考える。

論文の審査結果の要旨

本論文は、アイヌ民族のもとで、オヒョウやシナノキをはじめとする植物の韌皮繊維を糸素材としたアットゥシと呼ばれる織物でつくられてきた衣服に焦点をあて、多岐にわたる幾多の史資料にあたり、それらを分析することによって、1780年代から1880年代のほぼ100年間におけるアイヌ民族の文化や社会の実態を照射し、アイヌ民族と和人社会との交流や交易の歴史の復元を試みた論考である。

アットゥシは、従来のアイヌ民族文化研究において、アイヌ民族の伝統的な衣文化の中心的な存在であるとともに、アイヌ民族文化そのものを象徴するような位置づけを与えられてきた。本論文は、そうしたアットゥシについてのこれまでの位置づけを見直すことによって、アイヌ民族の文化や社会そのものの性格をもあらためて検証しようとする意欲的な研究である。申請者は歴史学を専門としているが、長年北海道沙流郡平取町二風谷に住み、アイヌ文化とアイヌ語の研究、および教育に従事するなかで、文献史料や絵画資料、さらには口承文芸資料を網羅的に渉猟するとともに、自らの観察や聞き取りによって一次資料の入手にもつとめてきた。本論文は、それらの多様な史資料を駆使することによってはじめてなし得ることのできた人類学と歴史学とを融合させた画期的な学際研究の成果であり、今後のアットゥシ研究の必読文献のひとつとなるべき重要な論考である。

本論文は、序章で、歴史研究における口承文芸資料利用の可能性の指摘、アイヌの衣文化研究史やアットゥシ研究史などの先行研究への批判をはじめとしたレビューののちに、2部からなるアットゥシに関する記述と分析をおこなっている。その前半の第Ⅰ部では伝統的的衣服としてのアットゥシについての記述と分析、さらに後半の第Ⅱ部では商品としてのアットゥシについての記述と分析をおこなっている。

第Ⅰ部 伝統的的衣服としてのアットゥシでは、第1章において、アットゥシとはなにかということ定義するとともに、近世の文献史料に見られるアイヌ語の分析をおこないつつ、アットゥシの素材や製作工程を紹介している。第2章では、文献史料や絵画資料にもとづき、日常着、ならびに晴れ着として着用されてきた伝統的的衣服アットゥシの歴史的な変遷について、記述と分析をおこなっている。第3章では、アイヌの口承文芸資料のうち、おもに英雄叙事詩や聖伝にあらわれるアットゥシについて分析することで、人文神アイヌラックルとのみ結びついた特別な衣服として意識されているという、アットゥシの位置づけを論じている。

第Ⅱ部 商品としてのアットゥシでは、近世、そして近代におけるアットゥシの産出と流通についての問題を取りあげている。まず第4章では、近世の北海道においてアットゥシが商品化され、さらに特産品として大量に生産され、ひろく流通していたことをあきらかにしている。さらに、幾多の産地のうちから、エトロフ島、ソウヤ場所、ヨイチ場所を取りあげて、流通の具体例を示すとともに、アットゥシの流通という視点から近世アイヌ社会の様相を浮かびあがらせている。つづく第5章では、近代の北海道におけるアットゥシの産出と流通の様相について、『開拓使事業報告』をはじめとする統計資料の分析をおこない、アットゥシ産出の最盛期である明治9年から明治13年にかけては、衣服用のアットゥシの反物だけでも年産1万反を超える大量の産出高があり、それらがアットゥシの帯や前掛や脚半とともに、おもに北海道における漁業衣、あるいは労働衣として供給されていたという事実を浮かびあがらせている。

そして、本論文の結論では、アットゥシがアイヌ民族のもとで単に日常着や晴れ着として自

給的に生産され、消費されてきただけでなく、漁業衣、あるいは労働衣という商品、さらには膨大な数量の特産品として、アイヌ民族のみならず、和人のあいだにおいてもひろく流通していたことを実証している。

申請者は自らが専門としている歴史学の立場から、民族学的、人類学的諸問題をあつかっていることから、本論文は基本的に文献史料に依拠するところが大きく、論考においても歴史学的な色彩を帯びていることは否めない。しかし、アイヌ研究に関してはとりわけ歴史深度を十分に見据えなければ、民族誌的現在でのみ語る従来の平板な民族誌に陥ってしまい、アイヌ民族の社会や文化を正確に語ることはならない。したがって、本論文が学際的な研究の成果である以上、ある程度歴史学的な性質をそなえていることは、方法論上いたしかたのないことといえる。また、論文形式についても、補足説明や引用文献を注に頼るといった歴史学的な傾向が認められるが、申請者自らの観察や聞き取りによる一次資料や口承文芸資料など、民族学的、人類学的資料も積極的に活用しており、基本的には民族学、人類学の論文形式に則っている。なお、アットゥシの産出高は、明治時代初期に最盛期を迎えた後、急速に減少していることが指摘されているが、産出高減少の要因や、現代アイヌのもとでアットゥシが文化的象徴として位置づけられるに至るまでの変貌の過程については十分な考察がなされていないことは惜しまれる。ただし、この点は今後のあらたな課題としてさらなる発展の可能性を秘めており、先行研究とは一線を画した本論文の画期的な学際研究の成果としての価値を損なうものではない。したがって、本論文は、今後のアットゥシ研究やアイヌ民族文化研究に大いなる貢献をなす労作として、学位を授与するに値すると判断するとともに、今後の申請者のさらなる活躍を期待する。